

美術の窓(45)

特別展「中国の金銅仏」に際して

大和文華館館長 吉川 逸 治

金銅如来坐像 中国・北魏時代



今秋の特別展は、すでに「百済新羅の金銅仏」、「ガンダーラの彫刻」、「シルクロードの絵画」などの特別展を済ませたあととして、二、三年前から、古代中国の金銅仏を行なうという気運になって、いよいよ難しい課題を取り上げ、全館挙げて、実行し果たしたことはめでたいことでした。

仏教彫刻という中国にとって、いかに大国とはいえ、全く新しい異邦の精神文化大系を受け容れ、しかも全く異質の造形大系を同伴して迎えねばならないということは、大変な革新であったろうと想像します。しかも、漢大帝国の秩序の崩壊した後、相続と新旧勢力、異民族侵入と漢民族の持久の死闘のうちに行なわれた中国独自の仏教文化建設の大業を開いたのであって、わが国の文明もまさにその余沢にあずかることによって、育成されることができたと言っても過言ではありません。

青銅時代の造形文化は、ユーラシア大陸を通じて、宇宙の神霊を

祀る祭器とそれを飾る紋様を創作しました。天を祭り祖霊を祭る銅器を飾る雷文、饗養文、様々な竜文、アジアの大平原の遊牧民はアニマル・スタイルと呼ばれならわされる鳥獣文の体系を創案します。

自然に恵まれたナイル河、ティグリス・ユーフラテス河の流域の豊かな地方に人類最古の文明を生む王国が相継ぎして興亡する国家形体の存在が古代のエジプト、西アジアの諸帝国の文化を作りますが、ここで造形文化は、神から王権を授かる巨大な神像や帝王像の制作や、帝王の宮殿の巨大な建設が促され、後世の他民族の王宮や、神像、帝王像へこれらの慣習が受け継がれます。

さて、古代オリエント（西アジアおよびエジプト）の諸帝王の建設とその神像や帝王像の彫刻、絵画は最終的には古代ギリシャのアレクサンドル大王と後継者らの諸王たちおよびその後に登場するローマ諸帝の造営に従事する造形家たちに整頓され、古代古典様式の

建築とそれに附属する彫像、壁画、諸工芸が整備され、いわゆる古代古典様式が成立します。アレキサンドル大王からローマ皇帝アウグストゥスの時代の建築で、それが実現される端緒がひらかれた訳です。そして、ローマ帝国を中心とし、東方はエジプト、西アジアに及ぶこの古典様式による建築の余波は、西北インドのガンダーラにも達したと思われ、仏教建築も古典様式の影響下にあったのでしよう。このようなガンダーラの仏教美術の古典性を教えられることは、中国の古代仏像でも当然中国の青銅文化の神秘性を希薄にして人間的表現をぎこちないほど強個に打ち出すこととなります。固有のプリミティブ様式の幾何学形を強く保持しながら、古典様式を受け入れますから、すこし後代の西欧のロマネスク彫刻に類似する様式に表現されます。この点では、わが推古、白鳳の金銅仏をその後に現れた一分派と見なすこともできましよう。

人馬文塚 中国・漢時代



石造二仏供養者像 パキスタン(ガンダーラ)2~3世紀

